

テクノロジーと法の未来へ

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

Vol.28

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、ITL独自の学びに迫ります。

取材のきっかけ

私は今、ゼミの活動として、能登半島地震で被災した輪島朝市の復興の様子を取材しています。そのきっかけとなったのは、父方の祖母の存在でした。祖母は20年近く前から輪島で働く方々の絵を描いていました。私自身は輪島を訪れたことがなかったのですが、祖母がずっと絵を描いていたことで「輪島朝市」というものに親しみを感じており、それをきっかけに今年



第94回一水会展(2023) 輪島の朝市 F100 山口 亜子
輪島朝市の様子を描いた祖母の作品

かけに今年の1月1日に起きた能登半島地震ならびに火災の被害を受けた輪島に注目するようになりました。ニュースなどで見ると被災後の輪島に祖母が描いていたその面影はなく、火災により朝市の開催が困難となった現場を見て、絵のモデルの方は今何をされているのだろうかという気になり、ゼミでこの企画を計画し取材を実施することにしました。

今までほかの被災地を見た際には、被災後の状況が印象的で、そこに住む人々が以前にどのような暮らしをしていたかということには考えが至っていませんでした。しかし、今回の能登半島の地震については祖母の絵の影響で以前の姿を知っていたからこそ、これまで住んでいた場所から災害により一瞬にして被災地となり、私たちと全然変わりのない日常生活を送っていた人々が被災者と呼ばれるようになるという事実を強く実感させられました。

出張輪島朝市の方々へインタビュー

時間が楽しいし、後ろを向いても仕方ないから前だけを向いて活動していく」とおっしゃって、和気藹々と作業を行っている現地の皆さんの姿が印象的でした。

作業の休憩中には、被災の住宅補助の話や地震が起きた当初の話などが会話の節々にあり、明るく前向きな裏で被災と向き合い、日々進んでいるとされているのを感じました。初めての取材でとても緊張していたのですが、皆さんの明るさや優しさに助けられ無事に取材を終えることができました。昼食の際も「みんなで食べた方がおいしいんだから!」とご一緒させていただき、インタビュー以外でも人々とかかわれる現地取材の楽しさを体験できました。



出張輪島朝市出店者の方々



国際情報学部国際情報学科3年
私立中央大学高等学校(東京都)出身

やまぐち りおん
山口 莉音

輪島朝市と祖母の絵、取材で見た人々の思いとつながり



祖母へのインタビュー

祖母へのインタビューは祖母の自宅で行いました。改まって取材を行うことに少し恥ずかしさもあったのですが、なかなか帰省ができずにいた私にとっては祖母とじっくり話す機会自体が初めてで、取材としての収穫とは別に祖母との思い出がひとつ増えたことがうれしかったです。

祖母は自分の絵を一目見るだけで、誰を描いたのか、どんな人なのかを思い出せるようで、生き生きと語るその姿が印象的でした。なぜ輪島朝市で働く人々をテーマに絵を描いているのかを尋ねると、その人がそこで働いていた、生きていた証を残したいという思いが理由の一つだと答えてくれました。絵のモデルとして選んでいた人たちは、自分の店を持っているわけではなく、地面に物を広げて売っているような、商売の事実が残りにくい人が多かったよう



カメラを片手に現地取材



病院に掲げられた応援メッセージ

です。

出張開催される輪島朝市について、祖母はそこで働く方々と顔見知りであつても、連絡先を交換したり、こまめなやりとりを行ったりはしていないようでした。それでも、被災後に出張朝市でようやく再会できた方も数名いたようで、安否が確認できて良かったと語っていました。人々の再会・交流を絶やさないことも、輪島朝市の出張開催の意義の一つだと強く感じました。

出張輪島朝市の様子

5月4日に金石港で開催された出張輪島朝市には多くの人々が来場しており、パフォーマンスが披露されるスペースや飲食スペースなども設けられていました。晴天の明るい雰囲気にも包まれた会場では、出店者の方々も来場者の方も笑顔。祖母はそこで、3人の知り合いの方と再会を果たすことができました。人が多く

長い時間話せたわけではありませんでしたが、お互いに手を取り合い、数カ月以上会っていないかったようには見えないほど親しげな様子で会話をした。そして、祖母が輪島朝市の人々をテーマに絵を描き続けてきた理由の大部分が、働く人々の温かさにあるのだとわかりました。

今後の展望

今後は、祖母の絵のモデルとなった本人に取材を実施したいと考えています。人々の思いを明らかにして記録を残すことは消して簡単なことではありませんが、自分自身が目で見て肌で感じたことを形にすることに注力し、取材を行っていきたいです。